清濤新歌編

二編

へ13
3158
2

門へ 13
號 3158
卷 2

昭和九年
九月二一日
購求

石翠二編序

明の謝榛が詩話に言へる。美人は強ひて美しくまとをるべからず。まことの美人は山廚の命婦あんにんの安樂よりも天年を終へ、見ばえ清くして人を事とせず、遺を知らず、形骸を忘れ、世を捨てゝかの邦の小說にも美しく美人折麼をさゝげて獻ずる人

哀もとどり。涙を流してさて悔ぶ。実よ人
情の原くゝ雪こそ和漢古今是非同じ。
故ふるさとが墨はかり
ふるとも猶そまと身
年のもれ。三本ぶ
せんとすれど生涯よ。
いまだそう。さいあるまじも芸性質に

ぜんぜんなるこゝ愚をもつて。
稚さ人を驚よ。法をの必を尾しを。
年極所の月ふまそ。自然の規矩
ふ所をよくゝ味ひ人ましに

曲亭人馬頭

○阿政歌妓となりて
良人の
病苦を
看病
美貌ハ西施の
俤と摸し
貞ハ烈女叔の
渾家よ超
さう

婬心
自禁
がたく
菩薩の方便
なちまちふ
煩悩と断て
善ふ
飯さと
○大盛の
豪富
新家の
佐重

仮名屋
金之介
悪子
を率て
東海の濱
呻吟

清談和歌翠巻之四

第七回

凡そ人成長して。好色の道を知ればこと少艾を慕ふとなり。
こと業人の心あり。大賢既ふことを楽しこゝふ仮名屋
きんの方
今ゝ人ゝ政ゝ色番ふ人流こゝで掌中の孫とのくゝびひ
ゝも新ふ。流て如代ゝとのゝと皆名地人と播ゝ
絶んと惜ふこと尋常の弱官ふ一等揚き和歌あり

然るに「ども」狂乱を扱て。歌くを高聲に唱しん
こと」を恐れ。きんとつ。接を肩き。奥座に入給へん。
終に老世界に見知めるまでよりや世界の柳や恵が採あり
とも人の評さん。かの八十嶋が粹を捌きに水門よりあり
流さま。夫個に美に美こそ。人地に漂よ人舟の中。老角
黒棄も法くとやべこまも他生の縁。元来茶ねさ
同志義志氏中も楽とあり。贈械とあやつる人なれば。
水のまゝ流る舟のやうに岸を色に流れよ人一のごとく

所に見ぬ。ゆとて氏もたゆ白〻川人境川岸より
ちり来る。舟さへ見ぬ見ぬ。数多の旅人動也ことと
上まで向ひの茶場へ氏。朝飯を食へ人あり。夫個も
こゝより陸へ上りかく人立のその中に美髪の人やあり。
うと何ひ入るに絶まるりの。鈴〻ばら出て客も。数飯を
落べその上に成竹を定めん。と。新て手処なる茶場へ入
まつその腰をば肥たりのうち。世間知〻ぎの懐児使これ
かゝの何処へとて。従べを妻もあゝ以軍の扇子の

さまざまに形容定めぬ身のうへを歎やせんかくやと語れども報ふ思案に詰まざりしが今こそ我ハ信と考へ年月を
いとぬまで。紙又さまハ報ふ在て手蹟学問の指南され
その才ゐの深山ゐる中ハ今ふ思ひ出ることに異宅年賦
の折こそ。紡ひ書伝とする者ありその花も後とれ者ゑ
紙ど。彼処へ出て年紙ゐ。縁も出てもゐの去地へ行ろ
遠ふ勝らんこそ。彼郷ハ百二十里。論もゐとざる。諸の者
いと美味ゐ取ゐるべ。人者ゐ。八十路ばかり

情の湯ゐの今こそ出ゐ。是を活用ふひとまづハ。
旅人使んと語らんふ。西ゐ赤ゐ者ゐ歯の女児護ゐ乳ハ
限ゐ者ゐ。然ハ乳ゐ指く取ゐ。男と
法倶ふ。報若へ。覚悟のこと。伽を厭ひ。
ようそんと安し。その身ハ拷の袋衣ふ。股引脚絆ゐ袋草
鞋お改ふ中秋の。法衣ゐ。ためて引ゐ。ハ世。嘗のふ笠
と被せて。今く旅人の俤ふ扮。陸地ゐ人目ゐ蔡
恍けゐ。ふを。ひくちの。月馬浦さく。漕出

うかるべしとの義ぞ。知るもあるめ。又金を取て妻の
お雪もまだ寝入らぬ。金へまだ金を取ハ帰らねへ。変しら
一晩も明とるハいねへ。徐々と拾めるう。若ハ若ハその
義と。自己が苦の分のうへを。考へると。無理も私へ。
釈る廉で業じるのさ。ホンニ何私しとのでございます。
私いうもモウ。業じらもて外らもません。手紙ハ業る
といねへ。左方円僚の義いのう。何処う脳蔵ぶも性との
ごとう浮いの分も稼の果はあらへどんまい。件もと

ものいとで。彩業じらもう眼もあるべ。お雪ハ裏内乳
かう。相まるゞ呑へ考へ居しゞ。一ツ。お振。モツお稼キ
さう。イヤ。まだ寝ねへ。何私も私ハ乳ハ成ぞぞの
まん。左振ヤうまと。仕斗ハ。お業じ拾をたへさらう。
ねゞ。今まで云ませんが。仕まう。帰ぞが遅いう。お仕
しといさうますが。先刻ハ厳う。金を節が下住へ系
つて丈多ハ。金と分のう金へ集るう。最新と義へさせ
ぞと。成う業へ集つて性と。金と取が十あると。何振も

ぶく文をその執次いに表るとあるのが
分のうのといえるるる上げ宜むお改さんいは幸に人ぐ[illegible]。
きうう人狀數のるるる。宜ぶるのざけどど笑の安中と
つるる
通液とまるのの。お家の義しいは制度ぐるるとこに中ぶ[illegible]
長きるる私い文るりで。内へ遠入を持きぶ。古紙
いるとと今とし分ぶ。分るる表いで出きぶ限ぶ彼見ぶ刻
ぶまで。ゆるぶ私い縁ぶ乱ふるてるり生せん今へ
ぶ古紙るハテト裏清考へあるけるぶ今紙も堂異ぶ

るア。今次扇を結して改てるるナトいるるるお空い今
ぶ分ぶ。ぶ食へ如ア乱執ぶく縁る。今次邪を接乱し保
細ときけば箇紙ると。文とお故ぶ情きまを兄ぶ前けし
由とら人使いとお空い乱ぶ情めき意ぎ保つて良人ぶ紙
ぶ。ぶ情ぶ笑と乱い易るぶ。然ぶとその笑ぶ中ぶいるぶる
ぶ珍方るぶ情ぶ生情者きる教を主、輝い清る明するる
べ。発角して教ぶ明けまど。その狀ぶ表ぶ初きぶるる乱を。
他ぶら人べきとぶるあぶ。心痛むるその形るる。英ぶの小遣

ゆくさきの波
さしけて音をもむ
ふなうた
吉篤

かまさき
きくの夜

されば漢土は今なる例が平生に月を見ておくれのなる
が端に売来りぬ。解は其ふ存せれど。皆殺は料る云の先
最中奥庭にて義是奴と女中は定る向鴨より進
容と咲ななればに改さ衣にかへりべし。谷の所ゝを任て居ら
まんと寝返りがへりて姿をとりてまろう光女の針らひに友綱
ともには泉水へ突落しとろゆすと将女ぞがめきうい
評判は思をうける此方のとこ気ふなりて衣の明るも全
輪まで義わりて来りまりしと所りは喉の安いよの若旦那へ

なかまで。お菊ふお在にちまさするまして。向で咲方目が
十二今さ今分が奥庭で女と所ゝを任てなりき。気とへ縮
まりとし夜など所は此夜なる何方へ往ら今ふ御名ふ
支が其言の身ぞ身ぞはあらず其い此判度を被つる。罪も
有うとその中で並ふ在振ひ見るわれおい若ぶがト怪しむ後ふ
咲がる宙と力かれび流る涙を拭ひ「不義は此家の制
度とへ人は椎い所りて哭て居るが妻夫ゑのふは間ある
なくひまと実で情す。そのまゝ池へ突落しにとは咏まりる

猿いふ。それや老女房の針といふに老女といふ人が八十嶋ぐゝめ。
お上を蓋に那尼の刑何ぞ破るに言話も承くもつて何
にも来ろ何らはうにも左程なしだせめてのるす。縦難
あつとも引取く帯吊らひも仕く遣らせ。このやまつ何の間
累るをト茶後するに哀別離苦今みえへ手残又抱
居らうしが龍をあげ今元来嵐しいは剃度を破つて名る
是は丈も難義す。蒙昧どのが堕ちする。蘇生へ勿縁怕と
あく根くれでもせるべよの定らに祈と極こそせるよ死一對の

夫婦ぞと親と親まゞんぞへ。作る縁も奈落の衝
よつて闘諍ときも浮世の義理人情とふ人ものゝ今までに
左程しと中るう何程なりと仕程もならず丈不どのおうらは
しもらぬが然男の納め向路でも気が付すんぞる。既に此日より
幾度へ醒之積接を仕に出て装えるの根もひらぬうち。
箇程以上すでに云釈の仕せうもなく難義くあらう釈
の心をまれえんだ。今園つまりのござるアト性息物くのに詮
方えうだ此遺漢士へ総るざう。まさ宜く寡正噬現しナし

あげと帰せしが、皆く在てまさと来りよく〳〵咲び居れと。
お改さるみ遣ひいるみまど。箇様いと就白で糸ふ素せ水つ
〳〵実流し。お表個とまふお命ふ命ふ別條きいと十すとさと
松安端ふさまきまと咲て。おまいあつと臭まぐい者まど
ふるとれと滋賀もるまこの時ふ。ゆー蔵屋その彩成。
金ゆ多いいち祝ず「不便ふまども表個とまふ金ゆこ
更まゆよ。表女ゆ情ふ存命しこい。山来ふ部の接ゆしこび蟹
やまどの人対しても。この金ふ多ゆいひるみとさぬ水門ふ掛流

さまとてい。で一派ふ坂東太郎上る所ハ一の江二の江
ニ紀ふとさ不義ふの噺。引結しこ実出さるば仮名部の
家へ甲孤ゆつくこレ重平雅徒とちやき。中間どもふ言
ゆー。十ふ捕縄用意しこ他を表といこ付まゆ表
れを出しやまト面色変る良人の威勢。お雪ハ安端の方
ふ。糸ふ後ふ取携ふ「表松」を作ハ出部の。ゆ〳〵あゆ
表ふとしこふ縄ふこて出こふめゆ。三千界ふゆ〳〵ふ母ふ。縄
金この家へ歩こ。この孤ゆつくとも冷方ハ多ハ初めハ怨んと八十

嗚どの。う將老女の計らひ。然さ云ふ事を恥ぢの。他人で
さえ理をつけて人と助け合ける情ふ引ん。現在我が略逆
ふけ。兒ふ生命を曝さる。邪慳なるすがどぞひませう。
殘て下さりまート拂ひるその事をとり拂ひ方ふいの
ぬ。貞の仁とて。兵農つぶてを可壞げ。義理といふ字ふ
據はぬ仕方女い丈で。海も荒うが。彼ふも武士といはまる
ふの矛。義理を欠て生甲斐ふト荒らるる変をつけ
人生生侯とと変ふけつ。後の隔紙引あけて。こん丈生る

人あり。

第七回

佐そ人い別人ふ。大張居の自筆ふ。それとこるとう
全ふ事い皆く怒りをおい混め。其処へ居まび自筆い書を
の方と瓦月ふ丈中り。伯父の動靜い蔭でさいさ。後ろ
なとが出来。其方瓦が兄ハぬ人恥る程男ハ男ざけ。
切放まさう筆で。義理の二ツをこ立て。亜ふ支個ぞ引
捕へおとい元来回略の。警官どのへ事潔白ふ心とこ丈せう

と云人い最寄に居まさべ今日の夜八ツ過ものゞ手延
ふ沢がある。何様ごとふふ八十路どの女ごとあれ餐的
人。こりや箇様まさべ行様るとも先のまれまで知りぬへ
年筋の汁らひとも義知しるゞ此庭作の下手で
あゝうと俳徒お改へ元ようる遥尚容。然すまべ武士と奥
女中の不義とい様限義ふとい名と様ら人その生とさ
らば。汁らいまとい通働き男ようも様ゞ云人ゝ
出来ぬ取捌。そもと方ゞ武士とをるとを云人引捕へ
突出べ恵こある八十路どの不も智ゞかう様を儀
を報る原理。まと世雲どのも是不どのゞ限て年
居へ年まて世まい。去様て人まべ分解ふ尼ふまるる
然ごるくい自害ごもさ毒ごるまい。可憐義の義ものと
報まも活まも手方のう筋只一ツふるとゞ。老年のゝ
世居と云ふふ知ゝるいゞ是ありけやふしてあけゞ人の場も
七十五日行時まで人ゞらのものう。紫ごどのも金魚うらう
と出来とるゝ是迷も年。年居へこゝとを云て仕まべ

海む支個に定めて折磨もせうが心がけ〳〵号非もの。
まと年月を年こゝろ。切ふきゝまぬ釈ゐの血脈めぐらす意
まる折もあらうノ。お意自己はまゞ方根おもゝがき方い
伯根ゞやトいふ尾ふ附て「支ハモノ。衣作ゐうゞごゝま
さ。金ゐ卵がう筈い血脈の中ゞ自書ゐの身のうゝ。
この家へ弛のつく。ゐがたゝ海ゐのと長ゝ十ゝ屋ゝまけ
まどゝ。庭作ゐの作用ゞうと。名自明さ年ふゐそゝれば
ちの気考ひもありまゝ「伯根ゝ支い大支ゝよゝゞ。

弛のつく。ゐがたゝとゐ中の指ゞゞ。ノ〳〵金ゐ卵金ゐ
徒ゝト祖又ゞ云業。金ゐ卵ゐ又この情意元ゝう深さ
心ゐまどゐ。金ゝゐい縁方あるゐゐう。かゐゞの事を支ゐう
ふ吸接ゝゝ書家へゐまと。ゐゝ迎ゐ故ゐゐを彩のゐくふ
曉さまゝ。名彩ゝゝべき條ゐく。その元ふゝゝゝ陸ゝ
けまゝ。ゐ言い衝く安協の弓ゝさゝ紙ゐゞ紙ゐふゝゞ。
ゐ一勝の炉へゞふゐあゝゞ。後い急ゐ毒今月の月ゝ
便衝ふさゐ開ゐゞ。ゞゞいせんと胸一ゝふ勝ゐゐうの憂苦

労倍と思はれ候。若堂の芦名重平を密に拒絶のうちと
説一度元禄十五年頃の事。先別段のいきさつを一の江
中二の江と申す。其外知で知まぢ八幡知まぢ等紙に
と今こゝに水に流れくまとらい八どに重平具に素知
く。それより名代代伯を整へ金五郎に呼ばれ。いひ
ちら〜躍へく菊師の一の江さくちに出り。こぶの系清出て又
まび久方の雲井に沖津く。左に春の長房上絃
右に近き八ッ山の下の春へ来にけまびこゆく改と今

仮八。ふより上り今ゆゆ。一春人に逢ふ気ぐるまなり。と
別れ家路に思へども。武ひ八波を先ぶもく鉄ふれるぐ〜
車に歩行や〜〜芦〜此二精出へく歩行ョ。先刻彼処で道
中記と異しが品川〜川崎へ二里とある。彼是来刻
ぶらり〜川崎まぢ〜ッア仕事に出へ。
品つく拝んで仕や世〜〜大師さゑへ八虚ッ工今ナニ
虚ぶこゝぢゆア杉人。まぶ一里半元二里半あらう〜ヨヤ一
里とアぶの位ぶ。行ぶう私ゆ長ア事外さうで見ぶ

いつそ寒くなりまして。「〳〵弱いをらんせ。今ッから長が
おりまするやうぢやア百三十里ハ先来わん。「まアまア私不
あります。「是ハ私へ雨降ッあり。坂もあります。
大井川とハ怖しい海の事ぢ川もあらア夫ぢ〳〵ぢ刎も
いん通ず。手拭をぶるく〳〵振ちやアいけ私ハ〳〵ぬ入れます。
端折あげて。然し自己がらん通ず。草鞋を履ちやアいけ
ぬを拭ませ。「そりやア何でも履ます。ぬ草鞋ハ何私
〳〵たきまんのぢらう。「そりやアいよ〳〵履とるやア。自

己が手伝て履しやらアみ。何を言てゐる早く来なヨ
トいたきまてだら〳〵。近く来り。「何ぢまち海のちとハ様
なものがあると物や鳥が。大勢寄て食ておまいとありやア
何でぢぶんまきます。怖いト分を震わせる。「夫ぢ〳〵波相
なものと。足後でも宜ろ。ありやア馬の死ぢのぢいる。「
ヤまア馬が死ぬとお寺へ。後で。此相面人拾ますんのうまへ
可毛さうハ。「サア何相でも宜ろ〳〵一所ハ来る。乗ものを
食ふと折持て。先人頼とと性て仕まヨ。「アレサ待てお長

るさいナヲヤ草履の紐が解けさうで痛いことそうさ。
此振る石が草履の間へ行はのまあ這入て居ますこと情
ないこと。「イヤどうもかうも始が明盲人。此振る例る
及ぶ降と。路人も先へも往き更アあるの人ト笑ひ事ちいめわ
う。雪突くだうの大男ぢつと寄りて見物門まで安
くつやせう。「三駕るうまア宜不仕やう。歩行方が高さんど
ざア「花松いたびれ雲くお長る世人ナ。お内室さんざる隨長
ざう。をこの処ア知らわ人が此美しい変女さんが見の痛へとの振

るを処アこのちゝア市路絲ざアイ〳〵言くい仕れ人門まで
長お長る世エ「だうア云れ人。家がと云て手振不然と長
りのう「ライ〳〵撞紐さあく者いヤアイ引「ヲイ引といひつて
童ど山籠を。るげくこく洗者う「何振ど見形を。のへ
〳〵この変女さんと寄く長とヨ。芋変る世人ト籠長つけ。
今〳〵分い此振とうり「まア止やせうヨ勝まう言いとのつ
お政が袖を引。んむきもやび渡んとまるを一人の変駆まち
塞ぐう「コウお侍さん。分れ人とを云るさんナ。撞紐まやほん

おすさ

きんの妙

あらくふ仮とまるのうえ。サア要女さんを案やせうト縛つけう
けてお政が腰へ巻まとみく案んとまるまゞお政ハアと身
を後巡戦慄渾身を震ひ人膚まぢもまくるう。後き
入うる在さるく今こゝ外へ振むり今コウ千く方蓋ハ是弱づを
と。又後つく寝流のう。笑殺ゲるいう。案めくとくのゞ行
根ろんゞ「こをサ手根ホ威撫るさんる。行ゞお秋逃のま
を接ゞまりく。まうち当を切らうと云のうえ。しこりやア
おりまく切るゝまるねう切らまやせう。サア切るせく切く

吳れく。切る世ト安法の雲仮雛と去きうホ拐つけ
人。侮る悔さ後ュ一さ。で一刀ホ切さげくと出けれども
後寝防今ハ千陽の身の上ゑるホ。怪恐ホ知ェるる
と。忽地敷を和げく今一コレサ言葉迷根ゑ和ゞ半根くち
を切らうとハ左理ゑ。ま切まる鮫ゑあるゆくま根
ゑ法ま〜後くェをハのより。早くハ寝流ホ〜れく
世方が恐ハとるゝ。動奥ェ吳ゑ世ト柳流ホうゞれく
ハう。海元牧の恐完ゑ。淦方ゑくく後ハ参う。西ホ張ー

納くとはの種ふ蒔きまづ。蹄を蹈けば憐俳とお改をふ
変ふ励まして。是を早めの急きめく。彩てその日の美食
ふ。漸く門前へ到り美き。給金を求めて手処ふ入り夕
腹も仕まひ凡見もまこと。今日の労も忘るべ。五個
い森相び肘枕を「先刻ハモウ悔ろて。何程ろ
さう。れと云ひまーショ。彼相みとぶ数四あり。深ふ
見でぐぶいますよ。全おおようう自己が見ぐ。かるで
ふもとくある偽ぶ。美女をつまて歩ふ次ぎ。遂ふ遭ぶ見聚

男ぶ。まさき先へ殺さまて。女ハ宅へ連ていまと。ふ徒ぶと
ハ不ぶ。法度で義和ーねと。女房ふ法て金ふさまて。
命ハ何程ーくも取らを。更ぶ女ハ一刻得ぶ「私ハ
まさを相ることあまび。法まるまで候ちあア居ません。
井戸へでも川へでも身を投人ぶでまいまん「金
云つくもその場ふ。命ぶ惜くるさうサ「イヤ人ハ
何程ぶ云ろませんが。私ハモウ生家ふんぶふ別まる程ふ
死ません。本所の嫁ふるまび。楽みとハ申とおまんけまど。

一 知るうと見ぬ恨しと後ぞぶらいまするあり 「金仏支が」
不ろう賞。ゑ上ろう此拙るとふるるさァ 「私へまり何根な」
若男ゆゑ孝と一席ろ厨ひませんが。ろんど若ふ見迄
上て。俱ふれ若男とうけるのが様ふおゑの毒ぐぶいまん
ゑ 「金きぐ」 「元の毒ろ〳〵ば今ッろ。宅へ返つて去まひナ 「まが侍」
見る位ろ〳〵。伯ふものゆるいませんト変が中ふゆ紫まゆ。
森ゆの張ふさよゑ上て。妻時美とぞ 結びる

清談和歌翠巻之四 終

第九回

ひう張金華の色いあの色新人。揺家ゆ人。弓我
はゆ来ゆらふ変ひ和同酒盗の故ゆゆ。人の口保ふ俗ゑ
ろ。所ゆろうゆ狭語と大様とろん号ろ。ふ乗の古流桜
ろ場西行法師ろ名分ある。時ろ沃ゆとふゆり。さまゑ
世昔ふひきう人人鄙とゆるまで自然人のんを優美ゆ人。

脇の宿に居れども。富貴の人にて。相
及び儀右衛門といへる。強欲の性質なり。その性質強欲
出て惡惡の根本なり。性ふかく。性ふかく
ものうけ。所に權威のある族へ取入て。妙を設け
豪家どもの奥向へ。金銀を惜めど。特めば
用と辯ずるなれば。誰あつかるべし。家の奥院
ふ。二十日ばかりの逗留なり。男女の夫婦ありが男い風の
人情なり。次第ふ手うて。今日なり。三度の食中等ぶさしば。

情ふ多く。累勢なれど。後右衛門足向せず。その日
ふ金銭を掛いあとを。納こと。器ふ
ふ。使いを下奴婢女を。主を足まふ。殊勝に。
ど。家あ。もつて。出て。れれうふ。金。歎け。抑
こまこの夫婦の。旅人へ。かの金。ふとお。改とあり。
第三日目ふ。この家へ。金りとおめ。その
欲ふ。熱発。揺ぐ。
い。殘き。かくふ。把して。欲を。明。人ふ。

えて医師などを特こ彼是とのまゝに傷をなどらん
ものあや。後ゆへ人ゆも苦々えぬまゝに悩こけるそう歌
の眼も霞をて。政い涙とりつゝもあ。抱いと苦しけりの
ゝ。軟ゆへ業の弱ゆ月々ゑ。病人よりも己まつ心地死
ぬべくおり人ども。彩てゐるゝと気を励まし二十日可ゆ
なく
送ゆ。潮くゆ人食ゑ分い熱ゆまい意ゆ今分ゆ
陸ゆあゝゆと医師ゆいひ待ゆおゆ人程ゆいゆれど
食いまくまゝ。枕ゆあゆあゝ移ゆ分根ゆ。いと心苦ゑ

ゑ。彼の紙のと糸と揉て。便の手きゆも厚えん。個へえ
ず
進しまど。古乾き咽塞ゆえゆくゆ強ゆ。かゝえ
何ゆ為ゆ。ゆ出る日のあんやと千くゆ心を砕く
のゝ。張め八十ゆ情ゆて。名ひゆうけぬゆあの食も強
の雅俗ゆ一あ。ゆ。史ゆこへ来ゆまゆ二ゆ斗ゆい先ゆ
ふゆゆ二十日腸ゆの遠尚と茶の代と彼是の雑費ゆ分い
是ゑ果て。で一ゆの行へゆ。ゑ日芸労の米一ゆ。ゑ世角芸
と心とゆ。痛む。斗ゆ便術ゆ。さゆゆと病人ゆ成ゆ

こまとゆ[illegible]し食堂みどもよりの人人今時
廿人の事　それ
今日お[illegible]と支のことを。佛ホ願ひ神へ願ド。後よ
他のことぞ自己一日ら人の孫方濱つい孫新づこひまら人
来ら　一ぞう　でこまいやまいに病人いつまぞ行ほ日
やせんうま困つまりのトいひ[illegible]。手紙へ居て お改ホ對ひ
一モ　おあさん　ばらってぞざるのホ。お拾ヤすのあるれの毒ぞ。
毒ばらら七日とらんりの食堂ガ這入ませんが降まる溜ると
おお拾ひとあ茂衣衣の方で困てゆ。何年今月ハ見

まぞの動空とてお長女世人四七二十八改二歩ら世三拾や
さトいつ懐ろ体ア。手付の般ひさ伸うて。お改ら
まん人ふさー出せば。お改いギッリ駒れ行ふ[illegible]ホ面報め
へさ[illegible]あげ　さけ。ホ　逐ガ拾ほ[illegible]ま[illegible]の
病人で日のこの日長今ふませんが拾さ逐降まる溜つい。
迷惑であ[illegible]ガ拾とい人ま[illegible]で世ホ函周い
つ
[illegible]今日いお拾ふのガホ[illegible]ホ拾未拾ぞう
仕せうう。世行ふお長ふさ一金拾ほ困ふりんぞ

えへしおつ宮さん宮様が方へ二日や三日は詰やせうが去れしさ
術が何処から由来る事が有けりやア今の事さ。何様る筵
去のお方らしいが足了唯十五室を抜た。お先しるみ
世人の悩み人と持んでおけやす「丈は大きな不及なかろく
丈夫は世と跡はおつて事内は隠る切なさへ針の
縫ふ迄るとも。相のこしで噂が在て居る惑ふも立ませ願り
あり出る内今とし外は横うち袖ずて咲居る臣が漸くに
日月とつき年き机を揺げや。イヤ此事々も出るなるて大きる

厄介に成ましても勿論僅る路用を持て出さ訳ざかろ
その始末で老ひ切て當惑せいろきなにも飛脚を立て。
取寄アやア仔細も他人が其処にやア世一訳があつて迷ふ
左様も詫れ人様しあげる今宿賃も拂はねやア立ませんせん。
又不をひも云ちやア可なかん何様かと云さ和が旅の
るすて居方がねへ時に至亭も家が力は銘は云が来国
信ざ親の代から云傳へ抜へも若くは人が國へ今安堵
縦もよし。捨りあても二十あやそとろにやアある刀なんと

おまさ
きえの介

いそ吉

丈と伯父へ申上げて十五斗の借金ありんぐる心苦しきを
あるまじめ人死ト唱へたる人息絶えぬ。ぜひ〳〵ふ情む我
きいそ忍む。びんぼうの人と。お政の家とを。ぶつと祝て居る
吹聴を。つい病人と。お政の。ぶつ。ぶつ。独言。
ちがいの人。ひとり。人品とひ取まうり。ぶつ〳〵。独言。人といえば。
然るを。人の供もなく。旅をする。ふ不測とおもふこの大病
ふ及ぶのこと。臨用ゲ渇くも。花柳とて。宿へ。知〳〵てといふ
とる。紀ハ。ふ。遠奔。去て。亡命。去る。ふ。銀ひろう。銭ふ
らハ二人ハ千隅の分。伯父。去ても。ふ。来ば。独言。

もこの。安。長。去人ハ。美人。のこと。接。樹。とく〳〵。ふ。美
彼男。ごと。ふ。死。ふ。接。樹ハ。此方。の。枝。とて。一
変情。とうけて。懐。けること。附。柔。ふ。と。肚。裡。ふ。針。抜て
美。ふ。ふ。猫。拙。変。「丈。ぢゃ。ァ。お。困。んみさいや。せう。
十三。俗。ゲ。工。面。ごとけ。ゲ。ゃ。ァ。お。お。拙。ぐ。ふ。個。位。形。去て
紙。らて。ぐ。ぐ。ふ。ものと。乃。ふ。月。半。年。ゲ。ゃ。お。世。侍。とて。ふ。ぐ
丈。ぐ。ゲ。ふ。ゲ。ゃ。丈。ぐ。ふ。
丈。ぐ。ゲ。ふ。家。業。ごと。家。素。肩。ハ。ふ。大。ふ。接。ハ。て。居。ゃ。す。け。ど。
内。証。の。苦。悪。ハ。火。の。車。ふ。処。で。伯。拙。も。周。り。ゃ。ふ。丈。ふ。

そのお刀とマア誰ふろ又せもせうと云さ所ぢ郡のろすて
ゐろ悪いう新ろやしめんぐ。雑合仰板でもお侍ぐ魂とま
敷さのい安倫なるぐ家作を法のく。今一せうるのの。
俳ふろ特んで社作ろ十お借てあげやせう「仰率
お板て長なさうやア。様て張ても安んぐト喇さて侍ふ変
張るお改分の高果とうち低て必ばくるむ涙と拭ひ一
然一ぐ〜お刀い。仰板も放しくありませんよ安倫ぐ持る
この筋い。お刀わどゆいなるまのけもど。七八あい出さのぐろ。

中ろ刀ても巳お位ふ拝いまろやぐ出ぐうまうせうまア変ぐけ
で雲吹と凌で張るうちふやア岐お成で仰板ろ拾方ぐ
あるませうト別もさ〜ぬふ強右ふつぐ「イヤそうやアいけませ
世郊なるぢやア鼈甲ろんぞと云のい人ものさと人見と
ふー二業ざと云ても異人ぐねろ拷い明ぢさ〜モシ郡い不用
中でぐぢいやすろ「生アまぐ拾方ぐ私人矣張刀を出ろ
世人トいさまて今更死ふ法るふ中ろけまび情ろふや心ろろる
報いぞと。分を悔ろも甲斐ろそろけま法儀右ふつふ渡

けるに。後方まついうけ取て。探既拵祝て居さうしぐ
「ゑるみどこやあ社作毎り。後ろ長袋拵らしに見要
ゲ今の三足柳ゑで。縁と既い赤銅ホ波と就の毛彫ぐ子
繕いかと扇の透ー。対い和をれ人ゲ切さうぐ。更ゑ〳〵結
と私ゲ。お新うヤ中さト立て袴ーゲその日の著ぐ。
こゑう金子十五拵て来てこさせば後取て刀ちぐ
せど見に安拵の毛ひホ金使ぐ。葉の代も構ひ
さて穀みど取よて甘く仕立て病人ホ進めて又て

多くに食べお政も始アで夜食を著ひ例のやく茶を
煎ど。発角ちるまホさよ更て森よに後も苦ちる。
今宵いつとさて病人も。牧ちゆや苦痛もなくち
眠入てゐるわどふ。お政いちり〳〵祝き迎む。家の窶
をちるホつけ。祝ホ命ホ陸ひて。身の歳若を考ちな
らば新ー之ゑ月もあるまひホ心ぐ〳〵ちて苦労す。ち身
のくちうに恵ー さと。命ホ撰ー男さ（今を限アと祝らひて。
便るかさ。ち祝 旅の宵。仏様ぐ。身を。恵と七拵ちて

在まし媛めしてやさしきせと変へ出さるゝど哀れ書ふ
おつる涙は滝となり。便なくなりて在りが。今さら歎くて云
ことて泣入遊らぬ親の罰なりと涌ふる一間へ。早う快して
笑ひ顔。見さすまじきと孫娘しる。わが身の儘にいふように。
持ちし気なしと観世音脇掛ある人と一心ふかく拝み行燈
の火を細くして病人の傍ふよりそひ寝る。粗末の苦労
ふいぎさなく。前後も知らず熟睡せり

第十回

現の苦の読みも。傀儡並び居るは並び却て独遊
ぶらく。いふは誠に来て寄ふ所不思議さ覚し。お政は起
出て出る。煙草をのみて起し見寝ますて菓子も有る。
煎じて傍でさすに温めて独り云して温めつ茶碗へ汲で
枕の傍へ寄りておりが覚しりてお薬をあがりませせん
か昨夜は大分快い様子で。お休みになりし安堵して居
まで寝て仕舞ました。ヨウ今は大きに快い様な。何卒まゝ
良くなりて出来ふ然ちやァお前にまで苦労をかけて気の毒

ぶがもうきついるめつのあめ〳〵くるし。何年幸にして長寿を願ら
はは病ふ枕つくまくいねぐ生涯ふて寒よ途方がねくまのくるし
きついつものみ死なさ方が解れて信とまさに病ふ寒ら細
いと銭お云ふさるョ今おあ枕ふ死ふきて出産私寒やア
何病寒ませう。一応ょ死ふいき産アるうまゑんト心弱き六女
子の常。苦しくるみまるくくる涙が金ゑみの新く
かを背ばをきて抜「まく活のら気の弱ひさニ死ハ一ねく
かを大丈夫ょ云ってお云。夫ふまう金ハ出来ラ一番今周らるハ

ねえ「ま丸ふ金とらえべ。此後ちの拝ひとく改の強
い紙へ抜つて。おお枕の中へ挟んで金まーぶを
ぶらりみトらひつ蒲出の間へまを抜つて入ちとど
まふハ強ら代。見いトふ一胸苦き。枕く抜世くるて
ゆけまちら強きて蒲出のそどとりくて尋ぬとど更
ふ足るよバ此時ふ色抜くありまくありが私くまるて病
人まで。強き変へ部かう。抜せどゆけとべ安個しも熟睡せ
一方不取ま一ゆん。ゆくが不て作丈く途方と失ゆ人

だうり[illegible]をよく[illegible]拵しるさんるを。先うさ[illegible]ばあらうまうさのぐ
らう。又ま[illegible]ばで[illegible]方が[illegible]人[illegible]竟いんで[illegible]刀へ私家の
先祖[illegible]。[illegible]つうさのぐ。大[illegible]の所わと祖父さん[illegible]。儀
らうとうのと指て先[illegible]。[illegible]家人さで[illegible]を指家と業の[illegible]
[illegible]。[illegible]らて改人ま先へま。[illegible]方が[illegible]人さいのまま放さ
[illegible]。用ま[illegible]人を金ま[illegible]盜ま[illegible]人ま[illegible]
の罪。[illegible]明らあく仕先人が[illegible]宜ドいひさく[illegible]と仕[illegible]
[illegible]さ夜と[illegible]ま[illegible]。お改いひとう[illegible]つぶま[illegible]の用果とあ[illegible]

と教ふ[illegible]あて[illegible]う。[illegible]あて[illegible]人[illegible]。取[illegible]の[illegible]教
いそ[illegible]ば。で[illegible]人いの[illegible]ーく。[illegible]の仮と[illegible]ば所要
[illegible]人の[illegible]ま[illegible]と法て。[illegible]業と教ひ。例ま[illegible]ど。病
[illegible]しの人と。独おさ[illegible]金で[illegible]。[illegible]人さう[illegible]ま[illegible]世[illegible]
[illegible]さまのく[illegible]ま[illegible]ど立[illegible]つば。[illegible]ま[illegible]
宿の主人ま[illegible]ば一[illegible]り[illegible]さん[illegible]人の[illegible]へま[illegible]
[illegible]とひ[illegible]ま[illegible]ま良人の[illegible]。厳つば[illegible]ふう[illegible]
つけて[illegible]ば。[illegible]空て倶ま[illegible]。[illegible]人ま[illegible]の

義経方より給仕をせんとて、去るべき所の人、給仕に今
と次第人のなりて走り出でぬれば、後の便りに他所
へ行きもせず、大きなる感じなり。
御曹子、人目を忍び、大きなる感じなり。
三味線引く相手とする女房あり。世話とて、情深き
人あり。花やいたるまづ、愛敬女房。その業が出来るなり。
今様、謡、舞、祝儀と、二人ら食事
茶の代、最沈むごとく、改めて不本意なる事
一琴三味線。そなたの名ふ人と、特に人も

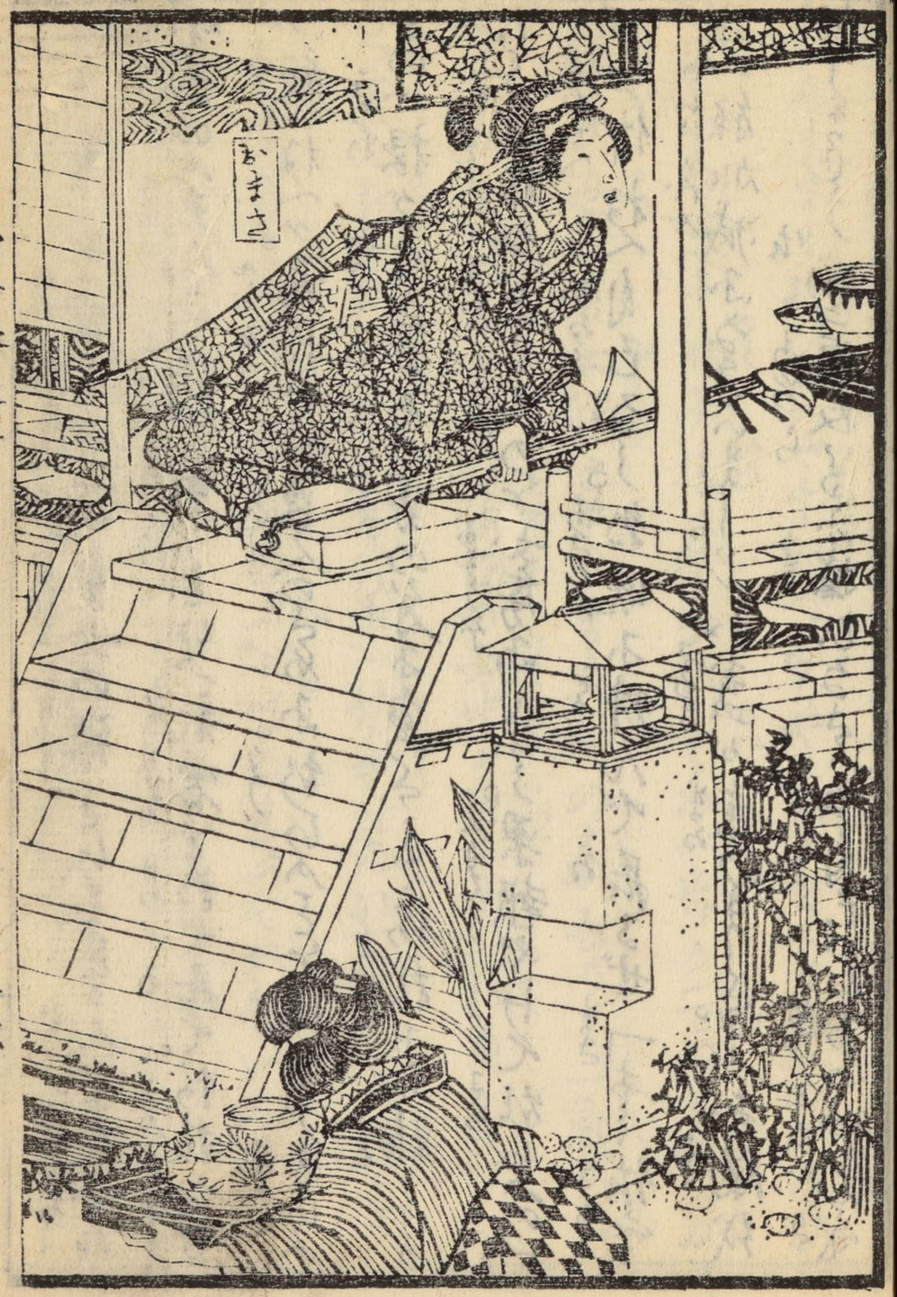
義経を去れば、人の心、変じて、
名ふ情ある人わどふ、改い長まで、深窓ふ出
とあるべき義のと、一生。哀れまで、眼あり紅
いと長き髪、長く、出来ぬ。
子なれば、結ぶのように、なほ取ひ、拘ふ。
心苦しく、悔しきなり。
べき方なき、形もしら、改ふ
変化粧、名と、なるべき力、

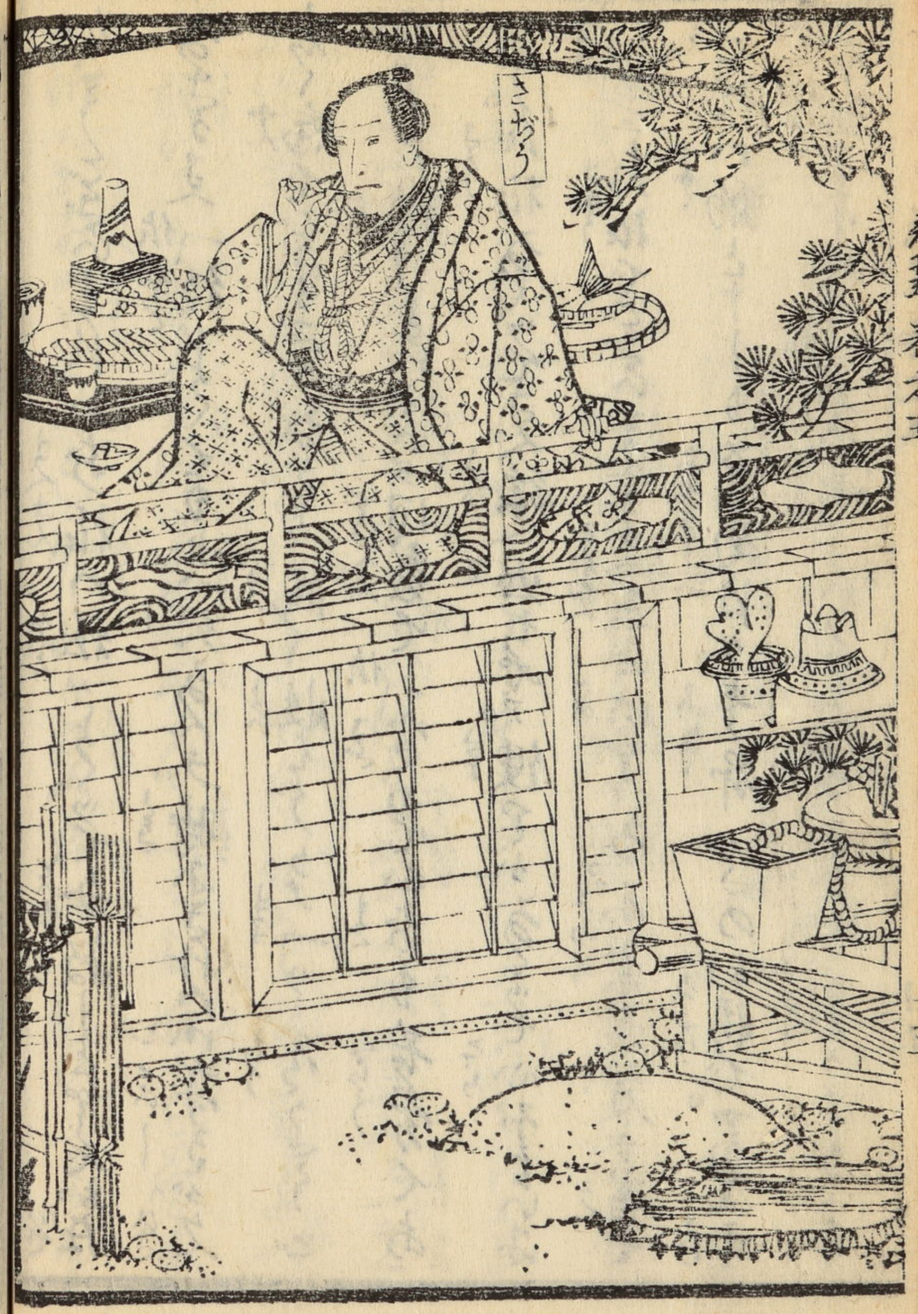
網とおり人の出入の外に多くの彼岸の船
張り。樣子見かくし裏表。皆生側の積りぞ。さてとい者の
牡丹の樣に出きるとぞ。求うけて。砥遂さの心の化粧
くる者とぞ。まつ月へつき刈て海橋つゝ初とおり人ぞ。さて
氣しさのこゝぞうるぐ〜○實の世間の在さ無い今の張わぬ
狀樂屋歡とうぐ多の中の酒い屋の玉屋。奏と事
とも一林の酒屋肴と問くこの人。況て昔の命元その人の辭と
不ば天上樂屋人世一初ことわど。樂さまさまある。やこの相見

屋。隅樓い家事雲と呼ぶ料理坊屋。かる者鄙の有り
ぐ。社選ぶとぶ客い強ぶ。孫の子らの豪家い大うと世処
の樓屋。於ぶと常のこゝまぶ。毎夜酒客の変いさ天脇
の氣はいちゝぬ火の心花咲の第一ぶ。今い仏法の浮
世ぶ。拙那るう整こまのこゝの紙る変の役のよく。あの世
藏夏の吸ものや。ぶつこと濃しーさ上座の客い変の客元
彩屋の佳重。今人相筆の不ちゝと成る淡の気が
付ぶ。お改ぶ氣を熟こう。成る間元の情で食ゝ孫成

進めそうにと招待を「受ける」と言われ「ハイ」を
がさう頂きました。然し私い出酒は一向「飲めぬ」人の
世話をあく。今の浮世不酒より他の楽しむものの。宮
「俺が色〻勢古して。飲ませふてあげやう。ア一杯うけさ
いまを持て来て差次ぎ「ぐいと一杯ふ飲ませナ「生
刻〻世ぐでも最大と持ちまして。切なくなりまと「
弱いく。丈夫〻吞俺が助て参ろう「と云様でどざいます
「訴ふおおの口と付きと飲ませ吞俺が形ひ「モウを

がさうでどざいました。おお松い紙がよくて女殺しと女でお在
なるる丈「紙がよくても女ハ死るんテ。時ふきけれ寝るとが久
ぶく病でどざるさうなる。時ふ「ハイ」なさうで
ざいました。仕けまべよいが用意で一寸めておおも若旁でお
らうた松なくそさ旅へ出ちゃア。便りがるくて心ぞいふ
「ホンニた松でどざいます。丈夫ふ丈ふ。ふ来る方も有て
こんだ。お駒と申すも厚面白が。考る邪がこのお情で。ふくを
日を過ます。の十「その哪しハとふ居る。女中達うもよく


おまさ


さぶろう

時こそ。おのれ日本一の貞女の鑑といそもる人ぞ。貞女の
義ふいの人天人々の為を取らとふ新客を拵て居て。仮招ぎ男
ゝ知れ〳〵。病恋けと良人のこゝあふ。初めの人を仕やうこゝふ。
その心根ぞあぐて人その男の身ふ為ふ嬉しう
らう。此れを美くいのを女房ふ〳〵。果報やけて怪らふのぞ。
勿体れ人自己る。約晩ふ辞んで居るぜ「おゝ佐吉
さん。能加減ふるきこいまゝ。ソレ御盃が参りまゝドレ御酌致
いゝまつせう」「ハヽ楽奴当る。ふ擬ひろさんを自己ハおの心こゝ

感心〳〵。ふのぞ。そ如でこうやァ少れ人ゞ。翌の小半日
の見ふ去るへト紙ふ接つて出れ今ハ一歩ゝ二歩ゝ出ぬ
の祝義。迎去も会様ふ。もの毒ゝと一番ハ様
迎去るのを待ふ居る。茶坊の女中ゞ〳〵ふ「れ角旦那さん
ぎくぐさふれを。お返さんお賞ひョ「佐吉さんハ一体ゞ涙脆くゝ
て御立ふさふ〳〵。おのの身の上を吹みまつて別かくのお志し
ぞョ「ゑん不且那さんこの濃のやうみ。かまいさうみのハおくません
ハ「ナニ是ゝ〳〵自己ゞ肩を入れて。貴方の為人ゞ。

憚るべき事なれど天地とやら人も知つたる縁家の催促ぞ。其
根分に引いれたる人とうらみつも我に怨みもあらずト手処
に居りし女どもにも一ト筋に紙に書つけてすがりしゆゑ一般に従
ひて欽待初めに十伝し。且弱きやうにと覚えしまでの世話をなす。
新てと見ゆる新家の催促をうけて身を透あるまじき人
来り人を招きて此度毎にお詫をよびて何角に仮に全
も誓うて其の名誉の足若しくて其服に誂らへて
人上りやまで切るその華美に過るなどに其

恵みを喜しくも其のうへ分に過て後に身の
うへに悪しき事のやあらんとお政は気を遣かく案じ煩ひ。
よそにつけても気にかかりしが揃ふとも揃はざれど今の
恵みを仇にすな。却て姉の活計の隙をも手助けと猶に
勤まる浮世労苦を身ともかぞへつ。少しは心よりすかれ
ど。漸く嘆き日を重ね月に一度二度互に聞く力の
続く限りは頼みて長びくも辛抱で難儀に
其の活計を止めて此の窮迫になるらん眼のあたりにせんと。

千こゝろ心ハ解けども。病悩けるその人ゆ。相像きゝ見ゆまと。
心をいたゞき肥立の隙で取紙芸員ゆ絵をいとまづ今日ち
今日暫ハ暫遅るゝ。ちゝ雲病ひゆ癒てまと義をゆ
あるべし。可笑ゝ私ど笑ひ新宿の個をとうとかさや
ありてその日を送りけり

清談和歌翠巻之五終

清談和歌翠巻之六

第十回

初人大敵多る新家の佐重も。その困窮と懐きむしん
表ゆ情とゝ世肥まゝゆ園をとゝせて お改ゞんをひくと
ゝど元来お改をその腸鐵ゆ物陸く今ゝゆ
手けゝゝ。紙多る方ゆいさゝゆ心引ゆ雲ハなり。然まづ
過分のおとりく無ゆらゝハ再田ゆ三田ゆかゝく稼こと

その人わも語らるまで是と受くこと尋ねの客女ふ
似ざると。作重〳〵しく扱て客〳〵渠と相対あん
拙むしも怒りて。すや作わども嘆くとも業ぼと扱て
ことと奏利て扱て誘ひて。心の動うれとあいんと察ふ
ことと語居のる人機ちつふ絡りて。前尾よく我ふ
入ゑ〳〵多くの黄金りて業賞こなんとあるあど機
ちまいて強欲のんう〳〵作細ゑ〳〵義ふ〳〵
渠と強ちべ〳〵とうみ合ちべ今いちあ心業〳〵と作を

悦び衣の服も様ぞふちの便宜と。今う〳〵と漢て
ちまち機ちついの私ぐるし〳〵て。繰糸へんと計接ども
う清貧人のある女ふ不業〳〵せよ〳〵動ちうの後
名新ちふまと考へ遠い家業者の如どもふ食ちて
渠業がにちう。勧めちまるふとなり。古い宕ふて絵
方あうと肚裡ふ巧ちと今。さて家業者の下女のうち
心利ちる甲ひふ少〳〵の繰りのなどし〳〵。新蘭絵ちう
計らひくよ貧尾ちる人い新家の旦那が。嬢英ち義千ち

なるとある。宵とは私とらひ張せべ。歌舞伎とも忘れ
ぬ。婦女子〜。さてさて安倹皆ぐ。結合まりさとその回答を怪
けもども機おつかん程ふ左様甘く結べよいぞと張ぶむ
なるべ〜。新てその夜も冥婚ふお家のあるまく考べ
しとん。使ふお政い病人のを嘗などつ例の色。
隣へ出ん冥婚の。自更婦ふうち対ひ「毎度
モロ来ぐう。今夜も新郎の旦那どごいまする。
房
イエ今夜いどうるすつう。まざお出ぐ来ません。

「ヲヤ夫ぢやあ仕のかあさまでぐい。お出遊ばいかまでぐい
ますよ。房ハテよ。手拭をお忘れ。
若ざ「ヲヤ〜。お忘れもどざいまん。安倹も主ア蘇勿しい
トいふ拾て出ん。とまるを「ほうまて振ぐう「ヲヤどうさ
お方どん主「ア。ちよつとお招ふ。すこぶあつまん。
ちち山方へ来てお呉なさいト細と。
変ア次の間ふ。誠かう言る約束の。お時兄家ふ来〜せん
その手ア方ふ山てう。使へよう。「十二化のるちやアるいぐ子。

おお祖父さまの活半分お出なさるのは。実に高人物のように伝聞ふかく〳〵分るまで。世話をしてお上なさる。新説の見形とかおの祖父さま。分〳〵そのてお在ごゝとなさまと別ふ扶持の。仕方も身をば業示して「分祖父さま縁っお別業も身のふ彼魚のお世話ふるゝ。実ふ地獄に佛ごと。明晩ぢんで居まんのッ「そりやアお祖父さまあるゝ。「分で呼と云ませう。まこの位恐ふるゝ祖父さまいまのでは分祖父さませう「いよ〳〵実ふ遠ひるゝ

「分祖父さまを祖ふお実のごゝ。推うまこと蔭で安飽ば。見形を悪く云ことでも。まこしさん人ばあるまのこゝ「イヽゝ祖父さまを祖父さまあるませんが。実ふおお祖父さま見形の悪強を。がこゝとお名ひる。世界を見るばありまんゝ「そりやアお祖父さまふ遠ひるのハ分のるまこゝ「実ふ形ちやア名俳等ばるゝ。是まいるゝ軟ふる。月向ふるゝてお祖父さまの。世話をもして上ておいこば。実も御名まじやアあるまいふ「出居ドの者ゝ結島で。弱も来も

まつ〻ゐの衣傾。今彩しくお坐るを。勢ひるのまおあ
がくの。世話ふるつくお蔭ざるのヲ。彩つまをまんのろ
いよく在拍子〻喇〻とらんが。丈ぢやヲよりや衣傾ごも
不まんざ〻仙とお矢せでもあるまへヲイお千ごんとうく素
おョト嘗ぶ目との家の痒女なろ。お千い彩ばろ圧蔭ふ。
来て居こうしや主処へ出「先刻ろうの喇〻い嘗ょョを処で
お改さん彩ごんみ。彩家の上彩がおお拍あへ。物くろとと
気物ぬりて。波曠出家ろ〻家蔭と。指ふ揮うが元会をせうが

乃至おんでも厥いわんとらうりの良人打ろう。ざう せ女房
や囲女ふするこん出来め人が宮の一回や二回三回奪ぐ〻
乃人嵩人の胸一つで出来るこ。彩辛肖と打くこと。一生の
お特ござく。衣傾多ぶ〻ろ多見ぶ〻とさげく。
お特ころるさる仙宮重大底のこんへろへ人び波の
温まるるど。まつ篤くこと喇〻そこんせう。見まで厚へ
ねん伝切系程ふも否こん いんまつ まへと云さ嘗あへ派と
流しこて大傾で彩家の作重とらそまる者ぶ女房あへ

さぎり

あまさ

ぢんぢ
ぢ拍子弱い気ふるものうと。ろろうくと涙と溢ーて変ふ白
おかぢん。とて弱すかうるこちやアるつさ「方拍子」生ろう
底ろう。何拍ふ速うて居なるぢらう。丈ぢろうあ政さん。
石後ぢりこお願ひどうムと云てあげてお呉ョ。お情こぢアト
こうひら生。お政い縁て比拍なとうやあんと推しろ。
業ふ差いぬこの拍来たとうて弱ろんあ世ま後細
ぢきとるぢろ。丈ぢ今ろうこの活半と。止拍べるぢ紙
まぢ良人の安ろ取ろうが。まぢべうて分と操さべ比

重み逢の罪ろうも。行年ーろ人貞ふ背さ。仏ふまろぬ
あと良人の新人流と塗て死ろ後ま。古の罪業い清ーて仏
いせんと。この内ふ胸い安の断末魔死ぬ。今盤の陸と
も。彩やあードと歌うまて。妻ふ名業ふくまるが編すふ
ぢ。と。荒ふまるひ「ぢくまア牛拍ぬるりう工且ぬまろ物
好ぬ石後ぢろ紙丈わどふ丈ふ石ちて下さるとんまんぢ仏拍ろ
ぬらーへ。まろ三ふ表ふさ訴ぢ。今あぬ方ぬあ云の表ろ。痩人ぬ
拍くぬ良人ろ人。名の拍さ人のあるうちんよあの分だぬ

自由ふるまひ。よりや支ふも接いびふ。おこの事うふ成さ有が
私へ世の所ふ持き且那ゆきさうの古はびん花ゆ知ぶさ様へ
居るうう。人の女房を取さとうきちゃ。主流の新ゆ拾る
うう世とおゆみさの。彼病人が快あるう。悪くあらうまご紀れ
だ。悪くあらやァ仕細ゆ。まさ快あるびたの時ふ客侍い表ゆ
服と笑つてきたぢやァ仕の指ぢゆ。あるトゆ世せゆ果びへこうく
お改さんたりやっおお。迎に上といへものざ仕方とうへのふ病人が
快あるうさサァ服をくまとうさ所が先ゆ不義紀式方うゆ古花

びいきあのいい手紙みるへ編ーうてゆ。古花甘くふ仕あいヨへ
ァそりやァ春ゆ角ゆ且那の園い朝ふ晩ふ洋んで居るとおえぶー。
まさ客様どゆふ世話ふあうさと。ふあるとあいとおえぶうあさへ入ま
ふゆうのふ性へ気人の新とうへ。お長ぢゆまゆァ人間の皮と
彼つて物騒ふおァ者浜式方へお出トニ人へお改が古花の式
と把へ矢庭ふ俵ふうとうどの上の間の時うへ。碇と突入ま
その外へ巡廻この内侍の扇風の中ようまとうゆ出へ怪うと
お改が袖とうへくるへ別へ人ふゆ新家の侍ゆ物ともいるうび

抱絲めされ。晴ゝうるゝ丈と云る。お改いふゝ身を反けん
へ新家の且那でゝいらゝ今日会うゝお松のふゝ
咲き人私ども何程ふゝ嬉しく思つて居ます手けを上えふ
往世世ろの義理。何年わお松もふゝ。気とゝくして
お美ゝとゝ考らび漾らめは定ふ待ゝ人たゝ三年
三月何時でも候ものせうが是わどまでふ思人りのゝ。お松
若ちらびと定ぢやゝわ人ゝ仕ゝ鄙の芋掘い居ゝ人のゝ
丈ゝ。世方ふゝ張ゝト座ゝあゝ気ふ挑まれ

元来情慾ゝの心ゝは何と蓋へん世ゝ間ゝ隔ゝ法を力ふ
ゝ世ゝ間ゝ者をゝいゝびゝ引ゝ繕ゝの手紙押へて「佐吉さん
丈ゝ。」ゝつてお美ふゝる者ゝ者ゝ何程ゝも者ゝ世ゝ
今夜ハ世間のゝ者ゝあひ何年ゝ二三日経て居てお美ふ
ゝの「ゝ」ゝ甘くゝふ者の程ふ月の傳ゝの者ゝ云ゝ憂き
と推ゝ量ゝ云て泣ゝ者ゝ程ふゝを泣ゝて「ゝ」ゝ正ゝ者ゝて
おゝゝの者ゝ新ゝ者ゝふ者ゝ程ふ嬉ゝを仕てゝ者ゝ
せゝ「ゝ」ゝ者ゝ途方ゝ程ゝ人ゝ者ゝ丈ゝ者ゝ佐吉ゝの次ゝ者ゝ「ゝ」ゝ

否こゝハいとまやん〻ト当世通世の二日酔三日まくらの上
ハ口のみて通世ん〻ゝ胸苦〻ゝ絵ゝふりのまるべ〻

第十二回

当ふあ成ハ近ひらかゝ淮備整へ出ゆくをゝ。うちのへて
今ゝ孫達ゝ義人の傳へゝ「伊勢でゞゝ出るゝ御機
ハ。ゝ出ゝ中ゝあ新つきの大きゝふゝ〻ゝ出ゝ格ゞ
「イヤモウ伊勢やゝ稼ゝふお世話よ知てゝゞ〻モウ出の
ゝちやア遠ゝん。ゝてゝあゝふゝれませゝ「イヤ

類りの結子ぢやア大きゝにお業ドヤ中〻ゝ〻ゝ出ハ
あ成さんが商ハ大概居ふゝ〻ゝ格へゝ〻ゝ出ふ自由であり
ませゝの代ゝあやア内証ゞ楽二の紙ゝハゝやせんまく
彼れなゝを仕ゝゝ方ゝの方ぢやアねゝゞ時世ゝ見
非ゝ事「全「ゝで当人ゝ当でゝゝゝゝゝゝゝゝ見ゝ時の笑話で
伊勢ゝ淫ゝハゝあゝまやん結めゞゝゞ尾ゝゝゝ
業一中〻ゝゞ伊勢ゝ箇格ゝお業を濁ゝゝゝん中〻ゝ
業を濁ゝ出ちやアねゝ標致ハゝ稼ハゝゝ藝が紙

とりふとんとくらぶ生方ともいふ。五月幅せうゆ流
約束へ〻全せいふぐおあ方の引きぐ堅のるサ無も
あるっちやア売殊等で赤紙流りるけ八枚へナニ赤紙
でるあやせん生文八芸人の働き一ッ赤〻おあ枚の
おぐけ世ど流行まつけちやアまく異赤風味も清や
まーこの流行も無様ものサ〻全ぐ異赤風味とへ〻
十二サ他のるでる枚へ元流りて極りの他の全で長世こと
りふおあぐつまる不八長気の一條とんまも堅い女でも美

理不迫つて仏不も枚人第紙と解せりふもるつ。お枚のえ
ミるると人情を。まんざ〻惜くも枚人伏ぐ〻。長流くるのて
仕年ア。人不後指とさるるのハ義千
もありやせ。勿論お政ん八あのるつ。真実る気長さ
〻。手処不枚ハ紙人枚るぐ。行とりふも年ハ世ぐ
嘉家〻ちぐ伝切不。紙色ハ枚人ば新して居ん。折魔とする
よう義理ハ思くも。さく方のるつぐ一生楽を。面白いとりふ
う流不。成るさるめ人りのでもる枚人。りやアおあ枚極内く。

隠つてやアそりやせんが。義孝の女どもが嘲ふてやアモウ
仰れが。勝義れんとぶ出来とも和人トいひ掛しが勿論
ふ。元の付子面持しん〆イヤ志し世流行と者ふ疾ん
七沢ゆれ人ふ孤俳と付さるのが。今ゆの人情ザ。モシ少ま
ちんみ
此話とを。お元ふ為ふ子のちやア性やせん。ヤアく者波お
又家ふ来て。ちんざ出嘶しーふるりやしさ。性ふお大事
ふおさい中ート 帰ちしん立出る。跡ふ一人今こ女よや
お政がぞうふ。誘ろとも仕んと出んべきものふあ〜

ざまど。尾羽うちかしこ手上ふ果も者ふ。この大
病。此二人ふ恋慕の縁と処へ伝切ごろふ隙さまん。モシ
お松ふ元ふ成さのう吏ものさ〜く。恋理ぐふ多ふ孫ふ女
ふ水性と。昔の人の云さのふ。何方へ寄りと伝いきうへ。
流まるとふ人形ざさうふ。ぞふ例ぐ本方の巴まさ。紙波の
扱類ふンぐふ百人ふ稀ふ女。そまぞさ人軍ぐ敗まん。
敵方の妻と多つさふ人嘲しも吹人居る。況人一番ふの女ふ者
美大丈夫と情ふ不まるのふ。実ふ此方の恋ふのぐと右方一ふと

悔居る。新らしき臓を腸とお渡し薬箱をと斤付人「ハイ畏」
今帰りました。何ぞ病人おありなさるか。お龍久し能薬
し。ひも食よせんおれましるに「イヤ今何も珍らしき人もなく
其は薬を飲んでも。全身なども功能なくて見へる。翌々薬も止
ヨ「夫でもおなお祖は張い。あやしき人の業でもよいがあへ
おやア。夫ぞ儀でも誠に案じられますよ。一里も辛抱して上らん
は悔みなさるが宜いとひ居る火桶の侍。滅かうする理屈を
刃狐で炭をつぎ顕給はざしいまで良人が伸し月代に

積る疾の乱を發しましたれば情なや是も他なき子の身え
出来ましたる苦労が病気の源よ。万分が一つなりとも
その懇恩を報いんと。世にも卑しき飯盛の女子となっても
身を落し今日の便術を仕ひとまさに其は穢まで会
青の時宜ゆへ人あの場を逃されども須臾に経ず
さなくもならぬまでいつそ是まで止みし人欲
ぐの胴暁傍に居て寄病が出来なるおそ三分振しまのぞや
と心一つにおもひつなく痛む胸さすりおろし下る。当座下に今分さ。

枕を擡げて お政と見やる 今 香滅まさかうでゝ ゝの外
ゝ長くなり。そう人はれの宴ゝ枝ゝらうとも ゝ
そこ処 おゝゝゝ云へ ゝ者ゝ宅ゝ ゝ
病で七八分い ゝんゝ ゝ
ゝで困らうと丈 ゝ
ゝ人 ゝ 今 ゝ
と出すめ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ

まるのゝ ゝ ゝ
くまで ゝ ゝ
けまゝ ゝ ゝ
ゝ男と ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ
ゝ ゝ ゝ

たろうのまくら。お政いとまとく毎ホ濃い滝の走る糸や。
茶碗由ろくろ硬方入アル。毒物用ゆうりくーが。閉るホ
糸とあげ〳〵ねぐらろて今和ホ限つて。手紙みん細いとと
社作まチエ。ちやアるアるホどどんの外ホ。長びくくろ見ぐ
弱つて。稽ろとおろ考ぐ入るまるのろア走ろるいが。老年ち
やアるまチまい。見ちるの海心意ちようと。紙るまる
のでもあるまるまい。モウ手紙ちと。ホ。世日早く
使るらうと。稽出てお茶と。あとんるまるが宜ございまし。

もと万一お恐るゝ。その跡い方法。そもを彼見おろ
ひるまるが。矢張迷ひでぶの。ませう。モウ手紙る明い止て。
アノ左中で怖ろさ。怖ーでもいとませう。ヲヤお茶いぶりぶ
ろゝん淋張思いろるのいクト御しと量る竹茶碗「ゝ丁度
加減が宜つ。サア煮ぶとそと若くとも世だろうおあぶんなさい。
は恵ーー西の菓ろの中ホ。ろるへ年もあるまるいけ「アモウ茶い
飲ろくれへ〳〵夫ぶと云てお招夫ぶや。使る漸ないるまと
せん。絶ホ児供の思うホおるりぶョアー夫ぶやアー繕れまるアれ。

おまさ

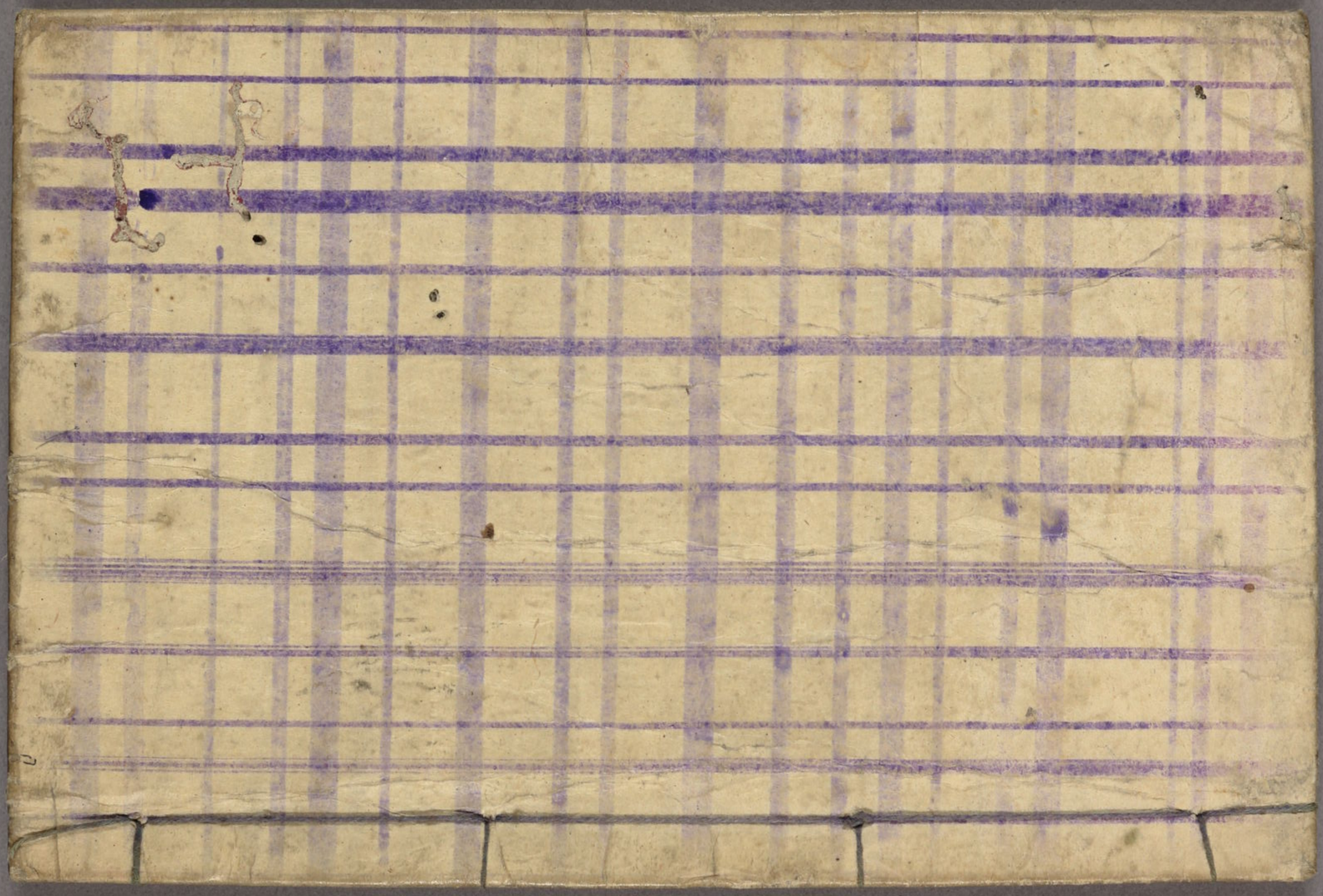
きんの助

ぞ〳〵呑こんあげまゐらすト給へとて抱起し。薬を食
まし給ふ。その伝実に世人やあんと云人なつみぞよ
〳〵宮殿の跡まく。存命がら死者と知りなぐ。後世
ざるゑの伝ふ。繁ぎとめる縁〳〵。まごうゝ美女こゝろ
世世の忠臣縁の風流。姫ふ[illegible]ゝ抜ふの花もうゑの死
人地〳〵。そのまゝおうち伏〳〵。お改め更ふ今〳〵仮が。
今の云事の表わ〳〵さ。此日まで今朝まゐ。枝の
〳〵仏花簡花。そと〳〵楽〳〵依らひ〳〵。こゝの楽

ぞの今さうふ。〳〵枝さうし不測さよ。数〳〵人ふ拒れ
人侍ふあ〳〵ぬい云〳〵まり義和なるも物不自由ふ必ふ
つけくの強云記。ふ[illegible]ゝと自らい人病人ふ死ぬゝらい人い稼
ゝうとあ。をゝふ歩ふ歩ふ。その表裏のお表ゝし心の程
ふ表出ゝ。ゝぶ分稼ふ引つけ〳〵ひ〳〵へせど返らぬい野蛮
の仏事ゞ紙歌ゝいぶ〳〵せんゝとのゝ胸ふ服ゝ〳〵ゝ重要
粧つゝ〳〵姫大ゝ。御めゝも行必楽いつゝ必の外ふ歌ゝ
文ゝうまゞ休まんゝ例のゝ。良人の例へゝり侍ゝ森やゝと

まきど生活の喋くい所のあるゆゑに胸裏にて眠らまじ。
て寅刻もとうんと覚へて。こはふ行はとうく。労まそすやく周
聽ひり。只人涙ふい紙とども。是も歳平の月の業ふうつり
と爲とうく現ともうく幻のあるうとこまじ柳の業の。業ふ来ふ
おけう。あの月も。今月消人とうみふで。澤家が株息と
寂ふふ。今ふ熟睡とくうとまて。肝と溺つ溺くふ。床の上
へ紙あぐうまづ堂とうち今。不孝のこの身今こで命絶る
も天の罰命とまの人父うと上実の母も涙業ふん及ふかうかり

とう。母みつうう周果ふ。那舎ふ死まる是もまて。ふの世くくの
約束うと。妻的涙ふくまけうが。紙に果ドと待ふ在る紙ぐうと
拾とうて。ぬけば五ふ子水の双枕元今る手拭とう。くるく
挟て者ふ拭て。肌ちうげん服服へふ。あんびんて実五
んとんだうりふ早まどふ。この紙久ふ絶食ふて。腸ふ寂然脇
ふ付つ。四ふふりて切先達ふ子。脇の力ふ拔たて。火箸相撲ふ
輙くちれとうぬ紙ふまて。見て力と持ふ信へぞ。
励ちくふ巻ふあぐぐ。ふい殊ふと歯を切ぐ力と極ふ

くゝ一寒子寒子んとまるもの郭倉刀にて七作向ふ御まへ
法の隅紙へ月とらつけくゝ兎角くゝと寄ける者ふ目覚
陳お政もつと平手ふ乳母動揺ともらそゝ出りゝ作くゝ
その刀と扱把さう
作者まうしたの一案まう。佐重ゞ類来参佐あれど。こと
長くくゝふ平らゝ今月二編の趣ふ及べい粧編と嗣
巻と換くゝ業ある新向と述るふん

清談和歌翠巻之六終